

平成27年度 博士学位請求論文 要旨

初期アビダルマ論書における多変量構造解析

佐野靖夫

Introduction : アビダルマ研究のための予備的考察と準備

仏教は、現代において主流の西欧起源の思想表現と異なり、異なるテキスト間であっても、たとえその成立に長期間の時間差があろうと、そこに記述されるテクニカルタームの同一性と収斂性に特徴を持つ思想体系である。例えば「仏」「菩薩」「涅槃」「煩惱」などの語句は同じでも、時代とテキストによってその意味内容は大きく異なる。アビダルマ論書の教理テキストを取り扱う場合、論書の成立に 500 年以上の開きがあったとしても、これまでの研究では無意識・無批判に同一のものとして取り扱うものがほとんどであった。

一方、アビダルマ論書は、後の大乘系論書とは違って論理を超えた論理は設定しない。あくまで歴史上実在の釈尊の言説をアーガマとして尊重し、その矛盾点に対して論理でもって本意を斟酌しようとしたものだからである。さらに説一切有部では、あらゆる事象を言語化しようとする試みがなされ、アーガマを論理的に再構築するための努力が強くなされた。

本研究は、アビダルマ研究に厳密な形でのテキスト・クリティックを試み、テキストごとにおける論理構造を模索するものである。テキストに記述されたもの以外のものは存在せず、テキストに記述された以上の意味でも以下でもないことを示す。そしてそのテキストに提示された範囲と限界を明らかにしたい。このような基礎作業を行うことを目的とするものである。

そのためコンピュータを使用しコーパスを解析する。文化情報学、統計学等で成果を上げてきた手法を仏教学のアビダルマ研究という分野に適応し、これまで不可能であったテキストの全数調査を試みるものである¹。そのため Intro. では、前提となる事柄を整理し、本論稿で取り扱う範囲と特徴を明確にする。とくに、論理構造を導出するためのコンテキスト・データベース構築の概念を提示する。

Chapter 1. アビダルマ論書における多変量構造解析の実際

ここでは、実際に取り扱うデータとテキストマイニング手法について述べる。文化情報学、統計学等で培われてきた手法をアビダルマ論書テキストに適用するための基礎的作業と概要を示す。

Chap. 1 - 1 - 2 - 1. テキストマイニング [I] 単純文字数と文字種類数

Chap. 1 - 1 - 2 - 2. テキストマイニング [II] 語句の切り出しとコンテキストデータベースの構築

Chap. 1 - 1 - 2 - 3. テキストマイニング [III] 同一語のチェックと TF-IDF (重み付け)

において、テキストの特性を見つけ出すことを試み、コンテキスト・データベースを実際に構築する。そして論理構造を明確にする手法としてのネットワーク分析の概念を示す。

¹ この手法は、自然科学分野における DNA 解析の研究 방법에大きな示唆を受けた。個別テキストにおいても、その成り立ちについての地道な解析が、結果としての大きな成果につながっていくものと信じるものである。

Chapter 2. 『阿毘達磨法蘊足論』におけるネットワーク分析

ここでは『法蘊足論』をベースとして、論理構造導出の実際を模索する。5つのケーススタディのもとに、アビダルマ最古層の論書のひとつとされ、一貫した論理構成になる『法蘊足論』において、ネットワーク分析の結果のネットワーク図の提示を試みる。具体的には、

- Chap. 2 - 1 - 1 - 1. ケーススタディ〔I〕 愛染 単概念
- Chap. 2 - 1 - 1 - 2. ケーススタディ〔II〕 愛染 複数概念
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 1. 第三積 vs 第四積
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 2. 第三積 vs 第五積
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 2 - 3. 第四積 vs 第八積 vs 第十積
- Chap. 2 - 1 - 1 - 3. ケーススタディ〔III〕 愛染 全概念
- Chap. 2 - 1 - 1 - 4. ケーススタディ〔IV〕 初静慮 論理概念
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 1. 正勝品
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 2. 静慮品
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 3. 通行品
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 4. 修定品
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 5. 覺支品
 - Chap. 2 - 1 - 1 - 4 - 6. 縁起品
- Chap. 2 - 1 - 1 - 5. ケーススタディ〔V〕 初静慮 全概念

において、30種類のネットワーク図を示し、単概念、複数概念、論理概念、全概念という複数種類の視点から論理構造把握の一助となした。

Chapter 3. 『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』

における多変量構造解析

前章をふまえ、『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』にも同様のテキストマイニングを行う。ここでは、総数35万文字を超えるテキストデータを取り扱うに際して、『法蘊足論』で開発したアビダルマ辞書を使用し、切り出しを行い、そこで発生した論書により新しく出てきた語句について、その語句を新たに辞書に含め、再度切り出しを行うということを繰り返した。このような作業があつて、はじめて大量のテキストを取り扱うことが可能となる。

さらには、『品類足論』において「初静慮」、『集異門足論』において「愛染」、比較として『俱舍論』において「愛染」「初静慮」の概念をみることから、『法蘊足論』を含めて各々の論理構造の同異を考察した。

Chapter 4. アビダルマ教理をめぐる諸問題

ここでは、前章までの研究に至るまでのアビダルマ教理に関しての細かい問題に際しての論究を以下の5項目に関してまとめたものを載せる。

Chap. 4 - 1. アビダルマにおける業伝達の解釈

Chap. 4 - 2. 三世実有と現在有体過未無体——時空座標解釈からの試み

Chap. 4 - 3. 禅定体験の記号言語化について

Chap. 4 - 4. 諸心起染

Chap. 4 - 5. 大不善地法成立に向けての論理構造分析

とくに「大不善地法成立に向けての論理構造分析」においては、数量化 III 類、コレスポネンス分析を試み、本研究をはじめの大きな契機となったものである。

Conclusion: 初期アビダルマ論書における多変量構造解析——結論と展望とによせて

以上の論究をふまえての結論を述べる。

Conc. 1 - 1. 思想史における非連続と連続 において、本研究の取り扱う思想史の基本的捉え方として、従来の「連続」的展開から「非連続」的展開というパースペクティブの変換を論じ、本来テキストは「非連続」によって成立するという立場を述べる。

次に Conc. 1 - 2. クラスタ解析にみる初期アビダルマ論書 において、『法蘊足論』『識身足論』『品類足論』『界身足論』『集異門足論』の5論書に出現する同一語を抽出した結果に対して、クラスタ解析を試みたものである。その結果、5論書の傾向を機械的にグループ付けしたものが、従来の研究に一致することが見て取れた。そして細かいグルーピング結果からは、その特性を見る事ができる。

次の Conc. 1 - 3. ネットワーク分析結果よりみた初期アビダルマ論書の論理構造 が本研究における直接の結論にあたる。論理構造自体を表わすものはネットワーク図もしくは表形式のものである。またそれを補完する詳細なデータは別冊の資料編に載せてある。その結果、個別テキストにおける論理構造の把握にひとつのモデリングを提示できたように考える。この手法の結果は、テキスト記述のすべてを網羅するものであり、テキストに記述されていないものはひとつも含まないことを想定しているものである。

最後にアビダルマ研究の今後の課題にふれて、本研究を閉じる。今回は六足論という最初期の論書を取り扱ったが、『集異門足論』など、もう一回丁寧に考えなければならない。この研究と手法がもう少し整理されれば、もちろん『俱舍論』『順正理論』『発智論』『大毘婆沙論』のような大部の論書で

の全体的活用が可能であろう。また、今回は漢文典籍を取り扱ったが、コーパス資料としてサンスクリット語典籍、チベット典籍が活用可能ならば、すぐに転用できるものばかりである。コンピュータは基本的に言語体系を問わないものだからである。テキストをテキストのとおり判断し、その事実の上に研究を重ねていくという基本的スタンスに、新しいツールと方法を提供できることを心から願ってやまないものである。

【補 - 1】 付論として、Chap.4 の続きでもあり、非連続モデルの例としてとりあげた『大毘婆沙論』見蘊見納足迦及の外道と異部』の論と資料を付す。